

## ◇富山大学生涯学習推進懇話会

日時 平成29年3月10日(金) 9:58～11:33

場所 富山大学事務局 大会議室

主催 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門

趣旨 富山大学生涯学習推進懇話会要項に基づき、学外有識者から意見を聴き、多様化・高度化する学習状況や地域のニーズに対応した効果的な学習事業を提供し、生涯学習事業をより円滑に推進するとともに、その実施状況について評価を受けるため開催する。

### 出席者

#### 委員

- 齋藤 幸江 (富山県教育委員会生涯学習・文化財室長)
- 山崎 弘一 (富山県民生涯学習カレッジ学長)
- 中西 彰 (富山県生涯学習団体協議会会長)
- 松井 治伸 (日本放送協会富山放送局局長)
- 中道 文夫 (富山市市民学習センター所長)
- 水野 清 (北日本放送(株)常務取締役業務本部報道制作局長)
- 勢藤 和弘 ((株)北日本新聞社取締役編集局長)

#### 富山大学

- 遠藤 俊郎 (学長)
- 鈴木 基史 (地域連携推進機構長 理事・副学長(地域貢献担当))
- 森口 毅彦 (地域連携推進機構生涯学習部門長)
- 藤田公仁子 (地域連携推進機構生涯学習部門副部門長)
- 仲嶺 政光 (地域連携推進機構生涯学習部門准教授)
- 平野 茂一 (研究振興部長)
- 蔵川 一正 (研究振興部社会貢献課長)
- 日水 栄 (研究振興部社会貢献課係長)
- 藤井 秀春 (研究振興部社会貢献課主任)

## 1. 開会の辞

富山大学地域連携推進機構の生涯学習部門長、森口毅彦氏より、以下の挨拶があった。

地域連携推進機構生涯学習部門は、前身である生涯学習教育研究センターの開設から数えて20年の節目を迎える。先日は開設20周年記念式典と、映画監督の本木克英氏を講師に招いて記念講演会を行った。この20年間で大学が果たすべき地域貢献の役割はますます大きくなっており、生涯学習の在り方も変わってきている。今後の生涯学習活動の充実に向けて忌憚のないご意見を賜りたい。

続いて、地域連携推進機構長、理事・副学長の鈴木基史氏より、挨拶があった。

## 2. 出席者の紹介・資料確認

## 3. 座長選出

富山県民生涯学習カレッジ学長の山崎弘一委員が座長に選出され、挨拶があった。

## 4. 議題

### (1) 平成 28 年度生涯学習部門事業・活動報告について

### (2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

議題 (1) において、森口生涯学習部門長より、生涯学習部門平成 28 年度事業の概要について報告があった。

続いて、仲嶺准教授より、公開講座の実施状況とオープン・クラスの受講生アンケートの結果についての報告、「富山大学と富山県立小杉高等学校との高大連携事業」「北陸 4 大学連携まちなかセミナー」の実施報告があった。

藤田生涯学習部門副部門長より、「富山大学サテライト講座」の実施状況、講師紹介等の実績、「生涯学習部門受講生オープンサロン・アカデミールーム」について説明があった。

森口生涯学習部門長より、生涯学習部門開設 20 周年記念事業、「富山大学市民講座 2016」「キャリアデザイン講座」の実施報告と、平成 29 年度事業計画についての説明があった。

議題 (2) において、藤田生涯学習副部門長より、次年度へ向けての取り組みとして、アカデミールームの設置やリピーター向けの講座設定について説明があり、生涯学習成果活用のための新しい取り組みの方針が示された。

## 6. 閉会の辞

遠藤俊郎学長より、以下の挨拶があった。

今、大学がどうあるべきかがとても問われている。今日は皆さま方からいろいろなご意見を頂いた。平均寿命が非常に長くなり、より豊かな生活を求めてさまざまなことを考える時代になっている。一言で言うとそれが生涯学習になるのだが、多様性のあるものをどう生かしていくのか、皆さまとご相談しながら、より良いものを目指していきたいと思う。

生涯教育もスポーツも、文科省の所管である。生涯教育はスポーツと似ているところがあり、いかに参加型で、かつ教えられることを楽しみながら、自分もそこで何を発揮するかが問われていると思う。生涯教育はこれからも大きな課題となるが、またよろしく願いたい。本学のメンバーが一生懸命頑張ってくれていることは学長としてよく分かっているし、大学が過渡期に何をすべきかを模索していることも事実だと思う。また、皆さま方のお知恵を拝借しながら取り組んでいきたい。

## 意見交換

### (1) 平成 28 年度生涯学習部門事業・活動報告について

(勢藤委員) ダイレクトメールは、どのような方々を対象に送っているのか。

(大学側：仲嶺) 基本的に公開講座や公開授業の受講者である。サテライトに来ていただいた方々には直接、プログラムやチラシのようなものを送っている。

(大学側：藤田) 本学の事業に参加した方に名前と住所を書いている。サテライト講座の場合、1回参加した方でも案内を差し上げるようにしている。

(勢藤委員) 延べ人数でどれぐらいか。

(大学側：日水) 公開講座であれば、過去3年ほどの受講生にお送りしているので、600～700人ではないか。リピーターの方も多いため、実数ではその程度だと思う。オープン・クラスも300～400人は送っていると思う。サテライト講座は毎年600～700人の受講生がいるので、リピーターを合わせると恐らく400人は送っているのではないかと思う。

(山崎座長) サテライト講座は8学部8人の講師でやっているが、会場があふれ返るほど受講生が集まっている。400人ほどしかまいていないのに、それだけ集まっているということか。

(大学側：藤田) 公開講座も同様、A4判のチラシを出しているため、それを見て参加される方がとても多い。

(水野委員) どこに置いているのか。

(大学側：藤田) 人の集まる所を中心に、県民カレッジにもご協力いただき、市民学習センターにも置いていただいている。

(勢藤委員) 富山市の受講生が際立っている。

(大学側：藤田) 県民カレッジの高岡地区センターなどにも置かせていただいている。ただ、冬季や雨の日は、足を運びやすい近場の人を中心になっていると思う。従って、講師紹介事業で大学が外向く形で、いろいろご協力させていただきたいと考えている。

(山崎座長) 県民カレッジは県内4地区にセンターを持っており、全てにチラシが置いてある。その他にも「とやま学遊ネット」があり、連携講座については全て登録して情報を流している。

(中西委員) ダイレクトメールについていえば、今までの参加者の範囲内ということだった。新規開拓は難しいのだろうが、大学で把握している以外のところにもダイレクトメールが届くように工夫されてはどうか。

それから、新事業のキャリアデザイン講座は2校で実現したという話だったが、その成果と、生徒や担当教諭の受け止め方を伺いたい。次年度以降、打ち合わせをする学校を増やす予定はあるか。

(大学側：森口) 成果は正直なところ、つかみかねている状況である。取り組みが始まったのが遅かったこともあり、打ち合わせが8月ごろになった。8月ごろは高校では既に年度内の予定が決まっている状況で、新規で実施することがなかなかできなかった。そういう状況で、別の行事とのタイアップの形で、南砺福野高校と高岡南高校の2校で実施させていただいた。

南砺福野高校では、いろいろな職業の方を招いて話を聞く「進路セミナー」の中で時間を頂いた。大学の先生の仕事はこういうものであるという紹介だったため、目的が少しずれていた。その点ではわれわれがやりたかったことがなかなかできなかった。それでも、高校生の皆さんは興味を持って聞いてくれていた。ただ、それがわれわれの望むとおりに、富山大学への進学に結び付き、最終的に地域に定着してくれるかということ、成果としては計りにくい面がある。この辺も今後の課題であり、やりっ放しではいけないと思うので、高校生の皆さんがどのような形になっていくのかということ計っていくような指標も考えなければならない。

来年度は、高校を中心に回ることも考えている。高校生の皆さんに話をすると同時に、保護者にもそのような話をして理解を頂き、将来の進路について家族で話し合うことによって、進路に関して地元志向が出てきて、将来的に地域活性化にも結び付く取り組みになっていくのではないかと思う。来年度はもっと力を入れて、新しい視点で活動を進めていきたいと考えている。

(大学側：鈴木) その点では、COC+で学生の地元定着を推し進めている。県内の学生が減っている中で、地元で定着させることは非常に難しい。他県に行った学生に戻ってきてほしいと思うのは当然であると同時に、富山に残る学生の多くは、富山大学のみならず富山県の高等教育機関を出た学生が中心である。

一方で、今は地方創生が叫ばれている。東京で大学の定員を増やすな、なるべく地方の大学に入れさせろという動きがある中で、われわれ富山大学としては、どのような分野が得意で、どのような特徴のある先生がいるのかをよりアピールし、理解してもらわなければならない。偏差値での輪切りではなく、富山大学は入りやすいけれども他の大学よりも良かったということもある。そのようなことも含めて理解を進めることが大切である。

従って、キャリアデザインでは、この大学に入ったら、このような進路に行くことができるということを広く伝えていくことが非常に重要である。県全体として、地方創生の問題として考えていかなければならない。その一つとして、生涯学習部門も高校に出向いて、いろいろな選択肢を勧めていかなければならない。富山大学でも名古屋受験や関東受験を進めている。こ

れはいいことでもあるが、逆に非常に難しい面もある。だから、地方の国立大学の役割は非常に難しいところがある。

## (2) 富山大学生涯学習の在り方についての評価と提言について

(松井委員) 今の大学は本当に忙しいというのが率直な感想である。私の大学時代、先生たちは何をしていたのだろうと思うと、適当に学生に教えて、あとは自らの道を歩むというある種の象牙の塔に入っていたのではないかという感じがあり、非常に隔世の感がある。

幾つか思ったことがあるので、まとめて言う。オープン・クラスは大学生と一緒に学ぶというものだったが、人数を見るとどうしても1クラス1人から数人になると思う。一般の方々が大学へ行きたいというのは、きっと学生時代の気持ちを味わいたいという理由もあるのではないかと思う。その点で、現役の大学生と触れ合う機会を作ることが、大学生にとっても非常に刺激になるのではないか。単一の集団にいて、大学という限られた空間にいて、キャリアを積んだ年配の人やいろいろな仕事をしてきた人といろいろ話してみることはとても重要なことではないかと思う。

従って、いろいろな形で来られた方と学生が話せる機会を、授業の中でもいいのでつくっていくことはお互いの刺激になって良いのではないか。公開講座とオープン・クラスの違いは、恐らくそこにあるのではないかと思う。学生にとっても有用な授業を進めることは難しいと思うが、そのようなことを行っただろうかと思う。

二つ目に、NHKの番組「ブラタモリ」と「探検バクモン」が人気である。両方とも大変ためになった気がして、しかも面白く、敷居が高なくて、知的好奇心を満たしてもらえる。これは、まさに大学の役目と同じだと思う。その点で、大変かもしれないが、例えば富山にはこういう魅力がある、こういう知られざる所がある、知らないけれども聞くと面白いといった講座を開いてはどうか。富山にこだわるのであれば、タモリさんが番組でやっているようなフィールドワークも含めてできないものか。このときは先生方の力だけではなかなか難しいので、場合によってはいろいろな事業所や自治体、企業などうまく連携すると面白い講座ができるかもしれない。世界遺産のプログラムも拝見したが、あのように例えば神通川を回るような形の講座があってもいいと思った。大学の知的な財産も生かしつつ、地元とも連携しながら、地元の魅力を掘り起こすことができるのではないか。

三つ目に、先生方の中に50年後、100年後のことも考えて研究している方もいていただきたいと思っている。今の大学のことを分かっていないと言われるかもしれないが、だからこそ言いたい。今の時代をどう生き残るか、今の時代をどうレイアウトしていくかを考えることも大事だが、だからこそ50年後、100年後のことを見据えて、自分の研究を貫き通す先生方が何人かいてもいいのではないかと思う。かつての象牙の塔のようなことをしるとは言わないが、このような時代だからこそ、そういう先生方の存在は尊いのではないか。

これらの取り組みについては、本当に頭が下がる思いである。皆さんが一生懸命取り組んでいることが地域の活性化にもつながるだろうし、われわれマスコミもきっちりと伝えていかな

ければならない。その点で連携をぜひさせていただきたいと思う。

(山崎座長) オープン・クラスに関しては、公開できない科目もたくさんある中で、公開できるであろう科目のうち半数以上を目安にして、前後期計 800 科目で実施している。

また、県民カレッジでは、高校の授業を開放して、共学講座というものを地区センターで開いている。希望がとても多く、大学の授業とは全く違うが、毎年 1000 人程度が受講している。学生と一緒にあって、たまに学生をしかってみたりしながら、お互い良い影響を与えながら学習していると聞いている。

(中道委員) 富山市の市民学習センターでは、富大や県民カレッジと同じように生涯学習の授業を行っている。当センターは、富山市に在住あるいは勤務している方々を対象にしており、定員で約 4100 名を募集している。今年度は 3368 名で、約 8 割に達している。一番の問題は、活動を市民や県民に知らせることがとても難しいということである。ただ、富山市には広報誌があり、特にお年寄りには必ず読まれるので、当センター受講者の 86.4% は広報を見て応募したと言っている。だから、当センターでは広報誌だけで PR していて、多くの方に来ていただいている。

最近の傾向を見ていると、完全に高齢者の方が中心で、平均年齢は 70 歳である。しかし、39 年前の初年度は平均年齢が 50 歳で、20～30 代のサラリーマンも知識を得るために来ていた。今は最高齢で 96 歳の方が来られているが、その方に聞いても「人生の楽しみである」と言っている。

大学からも講師に来ていただいております、大変魅力があり、人気講座がたくさんある。当センターの講師は 161 人いるが、6 分の 1 は富大の先生方である。その中で、特に歴史関係はとても人気がある。もう一つ富山大学の先生方をお願いしているものに、郷土の環境に関する講座がある。しかし、講座の中に「これから」「未来」という言葉を入れた途端に受講者が減った。70 代以上の方に「未来」や「これから」のことを言われても、私たちに関係ないと言われて困ったという話を聞いた。そのような中で、聞くことを楽しみにしておられる。

受講者は減ってきているが、当センターでは郷土を学ぶという大きな目的があるので、来ていただいた先生方には申し訳ないと言いつつ、一生懸命お話ししていただいている。しかし、毎年ずっと来ている受講者には「楽しい」と言っている。富山大学の先生方が当センターでやっている講座には相当な人数が来ているので、大変素晴らしい連携をさせていただいているが、募集の難しさをとても感じている。

(山崎座長) 講座の時間帯の問題もあると思う。日中であれば、どうしても高齢者中心にならざるを得ない部分があると、県民カレッジを見ていて感じている。土日開催がいいのではないのかという話もしている。その中で、公開講座とオープン・クラスを初めて受けた人が 3 割近くいることは評価できるのではないかと。必ずしもリピーターが多いわけでは決してないという気がした。

(齋藤委員) 昨年と比べて幅広く開講されていて、受講者のニーズに応じていると思った。初めて参加される方が28%で、新しい受講者も開拓していて本当に素晴らしいと思う。

それから、高大連携やキャリアデザイン講座もありがたく思う。アンケート結果を見ると、富山、高岡の受講者が多いので、遠くの市町村からも受けたいという方が増えるように広報を工夫するといった。キャリアデザイン講座では成果をつかみかかっているということだったが、富大も数十年前と比べるといろいろな形で生涯学習の展開があるし、COC+で県内学生が地元に着定するようになればいいと思っている。この後ももう少し検討されるということなので期待したい。

(勢藤委員) 私もこれだけ多くの講座が用意されていることに驚いた。私たちが大学に入った頃は「鬼仏表」のようなものが配られて、どの教授が鬼で、どの教授が仏かというのを見ながらコマを埋めていた。その点で、公開講座も受けてみないと講座の生き生きとした感じが伝わってこない。公開講座もオープン・クラスも、私たちからすると随分堅い印象がある。サテライト講座などは随分いいチラシがあって、中身に関心を持てるので、公開講座などももう少し面白い紹介の仕方ができればいいと思う。

まちなかセミナーなどは選挙制度や憲法、民主主義など時事性があっていいが、できれば公開講座にも現代性や時事性が織り込まれた紹介があると、行きたい気持ちが強まると思う。

若い人がなぜ東京へ行きたがるかという、東京でしか見られない興行があるからなどという理由が多いが、興行であればお金を出せば行ける。本当に求めているのは、コアな趣味の友達や会話が弾む仲間であり、富山県内ではなかなか見つからない。東京に行くと、ものすごく細かいニッチ(隙間(すきま)的)なジャンルでも愛好者がたくさんいて、そこで好きなだけ話をするだけで自分が解放されるという魅力が大都市圏にあると思う。

できれば、そのような隙間的な分野でかなり専門的な内容でも人々が集まり、若者に限らず交流できる機会やオープンサロンのような場があるといい。一方的に聞く座学だけでなく、終わってからも先生が入って、学んだことをおつけ合ったり、好きなものについて語り合ったりできるような時間・空間を提供できるといいのではないかな。

高校生に伝えるときも、座学で終わるのではなく、終わってから先生や学生が、大学の会話はこんなに大人なのか、こんなにいろいろなことを知っている人がいるのかということを感じられる場をつくれれば、大学生活に夢を持って来てもらえると思う。そのような時間・空間をうまくコーディネートできる先生がいるといいのではないかなと思った。

(水野委員) 世の中は働き方改革といわれ、大学の先生は全て結果や効率を求められている。大学だけはそういうところから除外されなければならないのに、そういう現実を見ると非常に同情する。生涯学習部門も、もう少しめりはりを付けて、絞るところは大胆に絞っていった方がいいのではないかな。大学はまさにポピュラー化、スター化が進んでいる反面、知の権威でもある。このようなアンチテーゼ主義の時代なので、そういう部分がなければ今のままでは日本の将来は不安である。その点でもう少し絞り込んで、人気商売の部分は人気商売に徹し、アカデミズ

ムにしかできない部分とのめりはりをはっきり付けて、そのいずれも同じ富山大学というブランディングをして、その中で構成していくことが必要である。

例えばEテレで放送しているマイケル・サンデルの「白熱教室」のような講義を動画サイトに上げて、富山大学から発信し続けていけば、先生が毎週出ていく必要もない。さらに、アンケートを取って、資料を作って、役所に出すという手間をできるだけ省くことも求められる。私どもメディアを活用する部分と、直接学生と一緒に取り組む部分のめりはりを付けて、年ごとに各カリキュラムを分けてやった方がいいのではないか。

(中西委員) サテライト講座のサテライトは「衛星」なので、七つ、八つあってもいいような気がする。一つだけでは、地球にとっての月ぐらいにしか見えない。通常、県内を大ざっぱに4地区に分けるが、各地区にそういう拠点が必要ではないか。既存の学校やカレッジセンターが幾つかあるので、それらを利用してはどうか。現在、8学部1人ずつが担当しているということなので、講座を充実させることを考えてもいいのではないかと思った。

(山崎座長) 本日、皆さま方から頂いた貴重なご意見が今後の大学の生涯学習事業の円滑な推進と拡充の参考になれば幸いである。